
風の都 雨の都

章廊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の都 雨の都

【Zコード】

N1099X

【作者名】

章廊

【あらすじ】

「その子を守護霊にできるということは、あなたが違う世界から来たというのは本当みたいね。昔もいたのよ。あなたみたいな人。至つて普通の人間のくせに、精霊に触れることができる奴がね。あなたと同じように、この世界の人間じゃなかった」

清貴の前に現れた、かつて国神とまで崇められながらも、その栄光の全てを失い、邪神として恐れられる風の精霊。彼女は清貴が元の世界へ戻る方法を知る唯一の存在なのだつた。

「キリ君、騎士たんこなるの?」

この地はハイランドと呼ばれる。高地に位置した土地柄が、いつも風が強く吹く。時に荒々しく、時に優しく。この地は長く風が守護する聖なる土地だと信じられていたらしい。だがそれも昔の話だ。今では誰も風の力を信じていらない。

一陣の風が吹き抜けた。全身を撫でるような通り風は、疲れた体に心地よい。ハイランドに来て以来、清貴の唯一のなぐさめは、この風を無心に浴びて空を仰ぐことだった。

まさか自分が「こんな」とになるなんて。もう何度同じ「こと」を考えたか分からぬ。どのように考えを整理しようとしても答えは出なかつた。貴清は堂々巡りに陥った思考を振り払い、ゆっくりと瞼を開いた。

眼前には「廃都」が広がっている。広大な草原の中に廃墟群がひしめき、その間を風が吹き抜ける。朽ちた建造物の随所で奏でられる風の音色はいつも空虚で悲しいものだった。随分前にこの都は捨てられ、新都が別の場所へ作られた。ここはハイランドの敗戦の象徴とされ人々は足を踏み入れようとしない。

ため息を一つつき、廃都を鳥瞰する。どこまでも寂しい景色だった。何度も目を凝らしても目に映るものには何の変化も見いだせない。

これは現実だ。

目を擦ろうが、頬を抓ろうが、気付いたらいつもの自分の部屋にて、なんだ夢だったのか、なんてオチには辿り着けそうにない。や

はつここれは現実だ。

清貴は東京の大学に通う普通の、それはそれは普通の学生だった。学校で授業を聞き流し、友達と共に昼食を頬張り、夕方にはバイトへ向かう。時々、就職のことなどを考えてみたりして憂鬱な気持ちになる。そんな大学生だった。

自分がその時なにをしていたのかは不思議と何も覚えていないが、とにかく、気付くと森の中で倒れていた。最初はそれこそ夢だと思ったのだが、どれだけ経っても覚めないのなら、これは夢じゃなく現実だろう。見たこともない異国風の町の中を徘徊する内に、ここはハイランドと呼ばれる国なのだと分かった。

次に分かったことは、ハイランドは地球のどこにも存在しない国であるということだ。ここには自分の帰るべき家も学校もなく、つまり生きていくのに必要なものを何も持ち合わせていなかった。

そこからが大変だった。一日や一日なら野宿もできようが、ずっとは無理だ。まず食べ物がない。お金もない。結局やるべきことはハイランドでも東京でも変わりはしない。

働くなきや生きていけない、ということだ。

風変わりな清貴を雇ってくれるような者はなかなかおらず町を徘徊すること四日。ついに力尽きて裏路地に倒れた。ここで終わりか、これでいいかげん目を覚ませよな、そう一人独ち、意識は薄れていった。だけれど、その願いは叶うことはなかった。

「おーい、キヨタカ君」

呼び声にふと我に返る。振り向くとローフさんがこちらに手を振つ

ていた。

「そろそろ帰るつ。じき暗くなる」

「あ、はい。すいません」

清貴は駆け足で恩人であるリーフさんを追つた。あの時、倒れていた清貴を家に連れてかえり体力が戻るまで面倒を見てくれたのはこのリーフさんとその家族だった。あまつさえ、彼の果樹園の仕事を手伝わせてもらい、見返りに家の離れにおいてくれている。彼がいなければ清貴はこの世界で野垂れ死んでいたことだろう。

「お疲れさん。今日も疲れただろう」「うう。

細身だががつちりとした腕で清貴の肩を叩く。

「いえ、全然大丈夫つす」

元気よくそう答える。実際は、慣れない農作業に全身が悲鳴を上げていたが恩義に報いるため弱音は吐けない。

「じきに収穫期になる。そしたら忙しくなるが、それを乗り越えれば収穫祭がある。ハイランドで一番でかい祭りだ。それを楽しみに頑張ろう」

どこの世界にもいい人はいるものだと思う。例え本当の意味で別の世界であつたとしても。

二人はともに馬車に乗り込み家へと向かつた。新都郊外に位置するリーフ家まではのどかな風景が続く。慣れてくれば、ここは悪いところではなかつた。東京のように「じちや」「じちや」とした土地にはない、肩に力をいれない長閑さに次第と馴染みだしていることに気づく。

リーフ家についたころにはすっかり日は落ちてしまつていた。窓辺からこぼれるオレンジの明かりに一日を無事終えたことに安堵を覚える。農機具をしまうのを手伝い、共に玄関の戸を開ける。

「おかえりパパ！」

元気の良い声が弾ける。小さな影がこちらへ駆けてきてリーフさん

に抱きつぐ。

「ただいまマリナ。いい子にしていたか？」

リーフさんの顔がほころぶ。父親の顔だ。

「うん！ してたよ。キヨ君もおかえり」

「おう、ただいま」

そう言つてリーフさんに抱きかかえられているマリナの頭をじごじごと撫でる。

「じはん出来てるわよ」

リーフ夫人も優しく出迎えてくれる。この三人が助けてくれなければ今頃自分は本当に野垂れ死んでいたことだろう。そう思つと感謝の念が込みあがつてくる。

テーブルにつき暖かい食事を頂いているといふと、話題は迫る戦争の話になつた。清貴には信じられないがここでは戦争は日常茶飯事というべきか、いつ勃発してもおかしく情勢だつた。廃都がそれをまざまざと語つている。

「なんでも、前線の堡壘がヴァルジア軍に突破されたらしいんだ。ああ、タカキヨ君、ヴァルジアというのは隣国の岩窟国家、ヴァルジアのことだ。この島は西のハイランド、東のヴァルジアによつて二分されているんだよ」

もう何度か受けた説明だが、この土地のことによく知らない清貴のためにリーフさんは丁寧に説明を入れてくれる。

「信じられないことに堡壘を襲つたのは、重装備をした女兵で編成された部隊らしいよ」

「女兵、ですか？」

「女性の兵士のことだよ。もともとはハイランドの伝統だったんだが、戦争が長引いたせいだつ。ヴァルジアも女性を戦場に出すことにしたんじゃないかな。だけど、ハイランドの女性は比較的長身で体格が優れた人が多いけど、ヴァルジアの女性は小柄な人が多い

と聞く。それで優秀な重装女兵团を組織できるとは思えないんだけどね」

「こずれにせよ、ふつそつな話よ」

リーフ夫人が顔をしかめる。

「ここにも戦争やつてくるのかな」

マリナが不安そうな表情を浮かべる。リーフ家のよつた農民にひとつ戦争は危惧すべき事態だ。戦火が迫ってきても財産である農地は持つて逃げることができない。結局すべてを失うことになる。平和な東京で暮らしていた清貴には感じたことのない危機感だ。自分にできる」とはないだろうかと思つ。でも、こんな居候でしかない自分にはなんの力もないのだと気がつく。早く元の世界に帰りたいと思う。

しかし。

東京に暮らしていた自分の生活を振り返る。一体その先にどんな未来が待つていいのだろうか。東京は平和だ。だが、その中で幸せな人生を歩むことが出来るだろうか。自分がなりたいものは? どうな風に生きていく? 結局なにも考えがないことに変わりはない。リーフ一家に気づかれないようにため息をついた。

「そのせいか知らないがハイランドは混成騎士団といつものを編成することにしたらしいよ」

「こんなセーきしだん?」

マリナが首を傾げる。

「混成騎士団、だよ。身分や出身、経歴を問わずに実力のあるものを募集して騎士団を作るという話なんだつてさ。ほら普通は小さなところから英才教育を受けさせて騎士を育てるだのつ。そして、いざ戦が大きくなると今度は兵隊を募集する。それでも足りなければ徵兵といって国民に兵隊になることを義務にするんだ。でも、それじ

や本当の戦力と呼べるのは最初からいる騎士団くらいだろ？ 徵兵された者なんて所詮は付け焼刃にすぎないからね。だから常時抱えておく騎士を増やす必要があるんだ。前線の堡壘が破られたくらいならまだ大丈夫だろ？ けど、備えあればってね

リーフさんはそう言つてソーセージを口に含んだ。

「まあ、騎士なんていつても格下扱いは免れないだろうけど

「リーフさん、その騎士団って誰でも入れるんですか？」

「うん。入隊試験に合格さえすれば誰でもなるという話だけど」

清貴の中で何かがびんときた。

「混成騎士団……」

騎士団に入れねばとりあえず食つものには困らないだろ？ いつまでもこの一家のお世話になり続けるわけにはいかない。元の世界に帰る方法が検討もつかない以上、なにかで生計を立てていなければならぬ。何より、この世界では変わった風貌である自分は怪しまれてまともな職になどありつけられそうにない。実力さえあれば誰でも、という文言は清貴にとって魅力的だった。

「清貴君、まさか試験を受けてみようとか思つてるのかい？」

「僕みたいなものでも受け入れてくれるのなら試してみる価値はあるんじゃないかと……」

リーフさんはフォークをテーブルに置き、腕組みをした。

「どうやら僕は余計な話をしてしまったみたいだな」

「え？」

「君はうちの厄介になつていることを察じてそう思つたんじゃないかい？」

清貴は言葉を返せない。

「別に僕たちは君を面倒になんて思つていないよ。君がいたければいつまでもいてくれて構わない。君が言うところの元の世界とやらに帰れる方法が見つかるまでね。何か職をもつて自活しようとする

る」とはいいことだよ。でも、何も戦争に関わることになる兵隊になんてなる必要は万に一つもない。それにここは君の世界ではないのだろう? それであれば尚更、この国の戦争に関わる必要なんてない」と僕は思つ

夫人もマリナも清貴を見ていた。真っ直の暖かい眼差しだった。涙が溢れそうになるのを懸命に堪えて微笑んだ。

「僕はやっぱり自分の力で生きていく自活力が必要だと思うんです。元の世界に帰る方法はもしかしたら一生見つからないかも知れない。先の見えないことに期待して何もしないわけにはいかないと思うんです」

「キヨタカ君……」

「それに僕は子供のころに剣道を習っていたんです。あつ、剣道つてのは、剣術みたいなものです。だからもしかしたら騎士が向いているかもしれません」

清貴はそう言って剣道の素振りをして見せる。懸命に強がつてのことばリーフ一家にはお見通しだろう。それでも、いつまでここで世話してもらひつ訳にはいかない。強く自分にそう言い聞かせた。

その夜、ベッドの中で悶々と物思いにふけった。啖呵を切つたものの、本当に自分に騎士なんて勤まるのだろうか。もし勤まらないと判断されたら即時、落とされるだろう。落ちたあとはどうしようか。またリーフ家の世話になるのだろうか。それだけは避けたかった。その後、リーフさんは、そんな必要はないの一点張りだつた。本当の親父のようにさえ思えた。ここは居心地がいい。居心地が良過ぎる。だからこそ、この環境に甘んじていってはいけない。強くそう自分で言い聞かせる。

俺は変わらなければいけないんだ。

すると、部屋のドアがすつと開く気配がした。隙間から小さな影が

「こちらを伺つてこる。

「マリナか？」

小さな影はこくつと頷くと小走りにベッドに近寄つてきた。グレーの瞳が月明かりに輝いていた。

「キヨ君、騎士さんになるの？」

清貴は半身を起してマリナを見た。まだ十歳の彼女は小さく、触れば折れてしまつた。

「そうだよ。お兄ちゃんは立派な騎士になつて手柄を立てるんだ」笑顔で答えて頭を撫でる。

「ここから出て行つちやうの？」

「時々遊びに来るよ。たくさんお土産を持つてね。マリナは何が欲しい？ お兄ちゃんが何でも買つてきてあげるぞ」

「マリナ欲しくない

小さな声は消え入りそうだつた。

「兵隊に行つた人はね、帰つてこないことが多いんだつて。おばあちゃんが言つてた。みんな必ず帰つてくるつて言つて出でつて。それでほとんどの人が帰つてこないんだつて

「そうか。どの世界でも同じなんだな」

「キヨ君の世界も戦争あるの？」

「うん。あるよ。大きな戦いが何度もあつた。僕が知らない昔の話だけだ」

マリナは泣きそうな顔で俯いた。

「こつちにおいで

清貴は狭いベッドの端に体を寄せてマリナを招き入れた。

「お兄ちゃんの世界の話を聞かせてあげるよ

「本当？」

「うん、この世界と同じよつて長い長い歴史があるんだ。僕が知らないことだつてたくさんある。そうだな、どんな話からがいいかな

清貴の脇に潜り込んできたマリナにいろいろな話を聞かせてあげた。

戦いの話はしたくなかった。様々な国の文化や食べ物の話を聞かせてあげた。話せば話すほど元の世界での生活がどれだけ豊かなものだったかに気づかされた。いつかマリナにも見せてあげたいな、そう思いながらいつの間にかマリナと一人、兄妹のよう寄り添つて眠りに落ちていた。

次の日から清貴は混成騎士団の情報を集めた。リーフせんの情報に間違いはなく、確かに身分や出身は問われないということが分かった。決心を新たに、試験当日を待つた。

新都へと出立する時、やはりリーフさんは乗り気ではないらしくため息をついていた。結果がどうであれ必ず戻つてくるようにと何度も言つてくれた。清貴は乗合馬車の中で一人静かに泣いた。こんな自分のためにここまで思つてくる人がいるということが嬉しくてならなかつた。しかし泣いてばかりもいられない。自分は騎士になるのだ。自分を鼓舞して奥歯を強く噛みしめた。

馬車に揺られながら見慣れた森の一本道を通り過ぎる時、若い女の子の囁き声が聞こえた気がした。マリナよりももう少し歳が過ぎた女の子の声。清貴は周囲を見渡すが太陽の木漏れ日の中を木の葉が舞うだけだった。もう一度耳を澄ましてみる。やはり女の子の声が薄らと聞こえてくるような気がする。こここの森には森の靈が住んでいるのだとマリナが話してくれたのを思い出す。もしかしたら自分を見送つてくれているのかもしれないなどと考えてみる。思えば自分がこの世界で目を覚ましたときにはこの森だった。

「いってきます」

清貴はそう囁き返すと木の葉が呼応するよつて舞い上がった。その舞を見上げながら馬車は都へと歩を進めた。

「貴様の言う勝つ戦い方とやらを見せてみろ!」

新都は華やかだった。様々な人が行き交い、様々なお店がひしめき合っている。そんな中、屈強な体躯をした者たちが吸い寄せられるように都の中心地へと向かっている。皆、混成騎士団の入隊試験を受けるのだろう。そんな中、清貴は見るにも貧弱だったがここで引き返す訳にはいかない。流れに沿つて試験場である中央広場を目指した。

広場の周囲は立派な鎧に身を包んだ騎士たちが包围していた。誉れも高きハイランド騎士団だ。彼らの身に着ける鎧を目にしたものは頭を垂れて道を開ける。見物人たちも広場から少し離れたところから礼儀正しく見守っている。

流れのままに広場へと足を踏み入れた清貴は目を見張った。ざつと千人くらいはいるだろうか。各自自信に満ちた顔をしている。ハイランド人は背が高く、清貴が彼らの中にいると頭まですっぽりと隠れてしまいそうだった。もみくちゃにされながらも中央で一列に仁王立ちしている身分の高そうな騎士の一団へと向かう。

集合時間の鐘の音が時計台から響いた。千人の志願者たちが雄たけびを上げる。これだけでも既に一つの軍団を組織できるんじゃないかと清貴は思った。すると列の真ん中にいた団長らしき騎士が兜を取つた。瞬間、周囲から黄色い声が湧きあがつた。清貴は目を丸くしてその姿を見た。脱がれた兜からは長い金色の髪が広がつた。よく見れば鎧の線が細い。きりりとした端正な顔立ちはまるで彫刻の美しかつた。見た目は二十歳そこそこにしか見えない。

「まじかよ……」

清貴は思わず感嘆をこぼす。隣の男が見ず知らずの清貴になれなれ

しい感じで声をかけてきた。

「騎士団長ヤーナ様のご登場だな」

「ヤーナ、様？」

「なんだ坊主知らないのか？ 騎士の名門の出の上に容姿端麗。槍の名手のヤーナ様だ。あんだけ美人なのに騎士団長なんだからな。家柄だけでなれるもんじやないぜ。なんせお袋さんは先のグルム戦役で包囲網を突破してヴァルジア軍を散り散りにしたラリシュ様だからな。ラリシュ様も相当の美人だつたらしい。親が親なら子も子つてこつたな」

そんな猛々しい美少女がいるなんてこの世界に来てちょっと良かつたかも、と清貴が思つていたところに騎士団長ヤーナの声が轟いた。

「これより混成騎士団の入団試験を開始する。何の遠慮もいらぬ。お前たちの全力を見せてみよ！」

再び千人の雄たけびが盛り上がった。

試験の内容はいたつて簡単だ。騎士団員と木刀で一騎打ちをする。そこで筋があると認められれば合格となる。

「おお、武者震いがするな」

清貴は緊張で手足が震えていた。試合は一度きり。そこで駄目ならまたリーフ一家の世話になることになる。それだけは避けたかった。騎士団員と選ばれた志願者の一陣が一列に並び、ヤーナの掛け声とともに一斉に両列が激突する。志願者たちは奮戦するもやはり職業軍人には敵わないらしく、次々となぎ倒されていく。結局、第一次の志願者の中で騎士団員を倒した者は一人もいなかつた。だが、そのうちの何人かにヤーナから直々に声がかけられる。その者たちは別の場所に案内されていく。どうやら勝てなくとも善戦した者には資格が与えられるようだ。

清貴はわざと後ろの方へ並び、試合の模様をつぶさに観察した。何

か勝てる要素を一つでも見出したかった。自分の番が来そうになると後ろの方へ下がり前の者の戦いを見つめる。型が定まつていないと志願者たちは隙だらけで騎士団員にいよいよ弄ばれていた。さすがにレベルが違います。さらに後ろの列へ移動しようと後ずさりしようとした時、背中が何かにぶつかった。

「いてつ、あ、すいません」

振り返つて謝りうとした清貴の視界に金の長髪が映つた。

「なんだ貴様、さつきから自分の番が来たら逃げてばかりいるな。どういうア見た」

清貴がぶつかつたのは、ある「ことか騎士団長ヤーナだつた。彼女は清貴の行動に気づいていたらしく、わざとそこに立つていたのだった。

「貴様変わつた顔立ちをしているな。ハイランドの人間じゃないのか。まあ、いい。貴様、誇り高き騎士の入団試験を受けに来ておいて逃げるなど、この試験を侮辱しているのか？」

きつく気高い口調でヤーナは言った。美人は怒つても美人だな、なんていう考えを振り払い清貴は弁明した。

「いや、違うつす。合格者がどんな風に戦つているか勉強してから挑もうと思つて……」

ヤーナの顔がぎりつと歪む。

「ほう。いかにして勝つかを考え抜くのは良い心がけだ。だが、他の参加者たちはそんなことはしていないだ。皆、己が全力をぶつけ戦つているのだ。合格した者は、中でも勝とうという気概が強かつたからこそ通過させたのだ。誰も貴様らに騎士団員相手に勝つことなど期待していない。基礎的な体力と、そしてなによりも自分よりも強い者に全力でぶつかつしていく勇気こそ我々が求めているものだ。自分が勝つために団体の中で一人違う行動を取る者など論外だ」

いや、それは考え方次第だうと言いたい気持ちを抑えて清貴は言

い返す。

「いえ、僕は何が何でも騎士団に入りたいんです。その気持ちの強さの表れであつて……」

「黙れ！ この卑怯者が！」

ヤーナの怒声が耳をつんざく。周囲のものたちは一人を遠巻きに見守つている。打ち合ひをしていた者たちも思わず手を止めて事の成り行きを見守つていた。

「帰れ。貴様のような根性なしには騎士団員は勤まらない。家でくだらん仕事にでも精を出していればいい」

その言葉を聞いた清貴は、心中でなにかが千切れるような感覚を覚えた。

「もういっぺん言つてみろやー。」

騎士団員たちの顔が凍りつく。

「つまりん仕事だと？ その仕事があんたら騎士を養つているんだろうが！ その立派な鎧も剣も全部そういう仕事をしているやつらから巻き上げた税で成り立つていいんだろ！ 気位ばかり高いお騎士様くらいになるとそんなことも見えない盲になつちまうのか。そりや立派なこつた！」

自分でも何を言つていいのだろうと思つた。それでもヤーナの言葉は許せなかつた。自分を助けてくれたりーフ一家も決して軽くはない税に生活の自由を奪われている。それでも国のためにだと文句の一つも言いはしない。そんなリーフ一家の仕事をつまりない呼ばわりされ、清貴は本当の親を侮辱されたような気がした。

「盲……だと！」

ヤーナが歎きしつしたのがはつきりと聞こえた。

「そうだろうが！ 気概で敵が倒せるのかよ。本当に勝つ奴つてのはな、いつでもいかに有利に戦つか考え抜いているもんなんだよ。気持ちで勝てるつて思つてている奴つてのは平氣で無茶苦茶な戦いを

挑んで仲間を無駄死にさせるんだ。母親は英雄だったのか知らねえけど、あんたがそんな考え方もつてているようじゃここにいる騎士団員をいつ殺しちまうか分かんねえな！」

真のヒーローといつものぞういう合理的な考え方を持つているものだと清貴は信じていた。剣豪もエースパイロットも本当に強かつた人というのは、気概や誇りで勝てるなんて信じちゃいなかつた。勝つ者というのはその場において有利な立場に立つてゐる者だ。いつでも勝ち続ける者はそのことを熟知し、いかに自分をそういう立場に立たせるかを考え抜いたはずだ。

しかしこの時清貴は、自分の言動が自身を不利な立場に追いやつていることに気づいてはいなかつた。ヤーナの相好はいよいよ激しさを増し、唸る獅子のよき殺氣を放つてゐた。周囲の騎士団員たちもその様子に手を出せずにはいた。

「い、いいだろ？ おい！ 木刀を持ってこい！」

ヤーナがそう言い放つと傍にいた騎士が木刀を一本携えて駆け寄つてきた。それをもぎ取ると一本を清貴に向かつて投げつけてきた。

「貴様の言う勝つ戦い方とやらを見せてみろ！」

「上等だこり！」

ハイランド騎士団長のヤーナ。対に立つのは風変わりな顔立ちをした清貴。一風変わつた取り合せの試合を誰もが好奇の目で見つめる。

先手を取つたのはヤーナだつた。すさまじく鋭い一撃が繰り出される。清貴は剣道を習つたことはあつたがこんなに素早い刀裁きを見たことはなかつた。からうじでそれを受け止めるが、次の一手が流れるように飛び出す。明らかに力任せの攻めだつた。女の子とは思えない腕力に清貴はたじろいだ。そして不思議と突くべき隙がない。誰の目にも見てわかる力量差がそこにはあつた。防ぎきれなかつた

一撃が太ももに撃ち込まれる。

「かはつ！」

堪えきれず片膝をつけてしまう。本来ならそこで終わりのはずだった。だが、顔を上げるとヤーナは次の攻撃のために木刀を振りかざしていた。

まずい、そう思つたが遅いか、左腕に激痛が走る。立て続けに背中。全身から感覚が消え去り、肺から空気が全て失われてしまったような息苦しさを感じる。

ヤーナは肩を上下させて息を整えた。

「ふん、思い知つたか。勝てる力もないくせに偉そうなことをひょうひょうとぬかしあつて。二度と入団試験に顔を出すな」

立ち去るうとする彼女の後ろでうめき声と共に地面を踏みしめる音がした。振り返ると苦痛に顔を染めた清貴が木刀を構えて立つていた。打たれていないもう片方の足で激痛が走る体を支え立つ姿は不格好ではあつたが並々ならぬ闘争心が漲っていた。

「訂正しやがれ。俺たちの生きる糧をくだらないもの呼ばわりしたことか！」

「まだほざくか！」

ヤーナが大股で清貴へ詰め寄る。完全に頭に血が上った彼女は、明らかに集中力が落ちている。今ならやれるかもしれない。そしてなによりも、一度もこちらから仕掛けることもなく負けるなどどうしても我慢がならなかつた。

ヤーナが大振りに振りかざした瞬間、清貴は全力でその懷へ突っ込んでいく。

鈍い打撲音が響いた。

騎士団員たちは一瞬感じた焦りを拭い、ほっと安堵の息を漏らした。

清貴は肩を強く打たれて地面に突つ伏していた。

「大丈夫ですか、ヤーナ様」

側近らしい騎士がヤーナに肩を添える。彼女はそれを振り払い、設営されていったテントの中へ入つていった。

その後ろ姿を見送つた後、周囲にいた者たちが清貴に手を貸す。

「ひどくやられたな坊主。でも命とられなかつただけ感謝しつけよ。両側から支えられて立ち上がるが、全身から軋むような感覚が走る。広場の隅の方へ運ばれて腰をつく。敗北感に満たされて動く氣にもなれない。

やつちまつたな。もう混成騎士団に入る道も完全に断たれちまつた。心中でつぶやくが後悔の念は全くなかつた。言つべきことを言つたし、やるべきことをやつた。それでこの結果なら致し方ない。肉体と反して気持ちは軽かつた。

なるほど、と清貴は思う。

氣概で全力でぶつかつて無様に負けを晒しても、こんな気持ちになれるのであれば、それもいいのかもしれない。ヤーナの言つこともう一理あると思う。

だけど。

「負けちゃ、意味がねえんだよなあ」

今後のこと少し思案し、深いため息をついた。

「これからどうじよつ……」「

一人の騎士がヤーナを追つてテントに入った。ヤーナと同じ指揮官を示す兜を被つている。騎士団副団長のゲーリットだつた。騎士団一大の男であるが、騎士らしく、むさ苦しさを感じさせない高貴さがあつた。

誰かが入つてきたことに気づいたヤーナは取り繕つよつに背筋を伸

ばす。ゲーリットの姿を捉えると苦しげに短く息を吐いて背を丸めた。

「お前か。驚かすな馬鹿者」

ゲーリットは軽く一礼して、近くの椅子に腰を下ろした。

「やはり胴に一撃食らつたのですね」

ヤーナは側近を見上げて口角を歪ませる。

「気づいていたか」

「大丈夫です。一部の者を除いて誰も気づいていません。ヤーナ様の圧勝を感じております」

「当たり前だ。私は騎士団長だぞ。あんな下級に負けるわけがない、だろつ」

「無理をなさらないでください」

「こんな無様な姿をさらす訳にはいかないだろつ」

懸命に耐えるヤーナの姿を見ながら側近はため息をついた。

「確かにあの者の言うとおりかもしれませんね」

「なにがだ?」

「我々騎士に気位は必要ないのかもしません」

「氣でも触れたか? ゲーリット」

「氣位は、眞実を包み隠すものです。ヤーナ様自身もうお分かりでしょう。」自身が彼の言葉に心が揺らいだのを。氣位がそれを隠そうとしている

ヤーナは俯き黙つた。

「失礼いたしました。余計なことを言つたようですが」

「お前には何でもお見通しなんだな」

観念したと言わんばかりに苦笑する。

「あいつが立ち上がった時に見せた目、ぞくりとしたよ

「そうですか……」

側近は腕組みをして目を閉じた。

「惚れてしましましたか」

ヤーナは途端、顔を赤く染め憤慨した。

「ち、違う！ そういう意味じゃない馬鹿！」

身近にあつたものを次々とゲーリットに投げつけ始める。

彼は器用にそれを避けながら一人つぶやいた。

「ちょっとからかっただけですよ。いい加減その方面に免疫をつけ
ていただきないと」

それにしても弄りがいのある人だな、と彼は思うのだった。

「あなたの守護靈になつひやつたじやない」

その日の夜、清貴は他の不合格者たちに連れられて酒場に来ていた。皆、騎士団員にせりひれて体のどこかしらを重たげに椅子に座していた。

「いやー、にいちゃんがあのヤーナに牙をむいたときは絶対にこいつ処刑されるなと思ったぜ」

酒臭い息を吐きながら清貴の肩を叩く。激痛が走るが、酒もまわり、いくらいか痛みもマシに感じられた。久々の酒の席であると同時に、にいちゃんの疲労も手伝つて飲むペースは随分と進んでいた。

「言つてやりやいいんすよ。あんな高飛車女頬まれたつてねえ」

そこまで言つて鋭く吊り上げられた青色の瞳としなやかな体つきを思つ出す。

テーブルについていた男たち全員が合唱するよつて曲を合唱させる。「抱いてみてえよなああ！」

結局のところ、そういう不潔な話をしていたのだった。

「ありや、ハイランドーの美貌だよ」

「ある意味では、にいちゃんが羨ましかつたもんな」

「あんな美人だったら、ぶつた切られて本望だろ。よかつたな、にいちゃん！」

頭をぐりぐりと撫でられるのを無視しつつ、清貴は新しく運ばれてきた酒をあおる。

「しつかし、にいちゃんどこの出身だよ？ 本当に変わった顔立ちしているよな」

「黒髪、黒目の人なんて見たことねえよ」

確かにそうだろ？ この国では誰もが有色の髪や瞳を持つ。ヴァルジアには黒髪の者もいるらしいが、瞳にはやはり色がついているの

だといつ。田立つのも仕方がない。もしかしたらこの風貌のせいで
ヤーナの田についてしまつたのかもしれない。

「東京からきたんすよ」

リーフ一家にしか打ち明けていないことだつたが、酔つていたせい
もあり素直に答えてしまう。

「トウキョウ？ そんなとこあつたけか？」

誰もが首を傾げる。

「この世界じゃないつすよ。別の世界から飛んできたんすよ。異世
界ワープつすよ！」

声高らかに言うとその場の全員が失笑する。

「なに言つてんだにいちゃん。打ち所が悪かつたか？」

「嘘じやないつすよ。すっげーでかい建物が空まで伸びてるんすよ。
馬車なんて相手にならないくらい早く走る自動車や電車が走つてい
るんすよ」

「ああ、こりゃもう駄目だ。これ以上飲むな」

そう言つて清貴の酒を取ろうとするのを振り払い、さらりと熱いよく
あおつた。

「あんだけやられりや妄言も吐きたくなるだろつよ」

馬鹿にするような笑い声ももう耳に遠く、意識は薄らいでいく。

「僕は、本当に異世界から来たんだ。本當だぞ」

一人呴くと、そのままテーブルに突つ伏し深い眠りに落ちて行つた。

* * * * *

どれくらい時間が経つただろつ。清貴は未だ居酒屋のテーブルに突
つ伏していた。もう騒々しい声も聞こえない。
早く帰らないと。
そう思うが体が重く、動く気になれない。

突然、頭に心地良い感覚がした。誰かが清貴の頭を優しく撫でてい

るよつだつた。耳元でくすぐる様な落ち着いた声が囁く。
「おにいさん、トウキヨウつていうところから来たの？」
綺麗な声だなと思った。全身がふんわりと包まれるよつな感じがした。

「そうだよ。東京から来たんだ」
酒でかすれた声でそう答える。

「そう、それはこの世界にはない都なのでよつ？」
清貴はゆつくりと頭を横にずらして彼女の方を見た。
長い髪に細い体躯。一瞬ヤーナかと思ったが、彼女はこんな優しい
声音では喋らない。よく見れば髪は信じられないほど艶やかな青色
で人のものとは思えない光沢を放っていた。清貴の隣の席に座り、
頭を撫でてくれていた。

「信じてくれるの？」

「さあ、どうかしら

彼女はいたずらっぽく笑った。

「あなたには人とは異なる変わった力があつたりするのかしら
「変わつた力？」

「そう。例えば森羅万象の力を操れるような力が

清貴は頬を歪ませて微笑み返した。

「そんな力あるわけないじやん。今田だつて騎士団の入団試験に落
つちゃつたし」

「お転婆ヤーナを相手によく戦つたと思つけれど？」

「見てたの？」

「さあ、どうかしら

凜々しいヤーナもいいけど、こんなお姉さんもいいなあ、などと思
いながら再び睡魔が襲つてくる。

目を開けていられそうにない。もう少しの子を見ていたいのにな
と悔やむ気持ちも眠気にしなだれしていく。

「もう少し見守っているわ。あなたが殺すに値するかどうかを」
意識の向こうで彼女が何かを囁いた気がしたが、うまく聞き取れなかつた。

清貴を含めて幾人かの酔いつぶれた者たちは、居酒屋の店主の手にうよつて店から放りだされた。その場で再び寝始める者もいたが、清貴はふらふらと立ち上がり遅すぎる家路についた。

夢の中で話した女の子は誰だったのだろうと思う。頭を撫でる優しい手つきだけが無性にリアルで現実だったような気もする。

通りかかった遠方行きの荷馬車を捕まえ、森の入り口まで運んでもらうこととした。荷馬車に乗ると同時に三度目の眠気が到来し、瞼を閉じた。

森の入り口で下してもらった頃にはもう朝になっていた。朝日が目に痛く、森の木陰道に逃げるように入つていった。森の中は静寂に包まれていた。木がさざめく音しか耳には届かない。片足を引きずるようにして遅い足を進めた。毎までには森を抜けてリーフ家に辿り着けるだろう。帰った後はどうしようかという悩みは尽きなかつた。あの騎士団長がいる新都へはもう行きたくないし、やはりリーフさんを手伝うことくらいしかないのだという現実に突き当たる。もう何度も目になるか分からぬため息を突き、木の根元へ腰を下ろす。見上げれば、木々の間から青い空が見える。脱力感を沸かせるほどに澄み切つた青空だった。

木々のざわめきの中から、またあの女の子の囁き声が聞こえてきた。よく耳を凝らしてみる。やはり木の葉が擦れ合つ音だけではない。何かが森の中で囁いていた。

風が吹き抜けて新緑の葉が幾枚も森の中を舞う。声の元はその中から聞こえていた。

清貴は立ち上がり、無心で木の葉の舞の中へ手を伸ばして空を握った。

すると空気を掴んだはずの手は、なにか細く柔らかいものを掴んでいた。

瞬間、目の前に女の子の細い体躯が現れた。彼女は木の葉の舞の中、宙に浮び、驚愕の表情を浮かべていた。清貴が掴んだ細く柔らかいものは、彼女のーーの腕だった。

清貴はおののき、手を離す。

少女はそのまま態勢を崩して地面へ落下した。

べちゃつ。

顔面から突つ伏した彼女は、鼻をさすりながら身を起こす。

「ええっつー！」

清貴が驚嘆の声をあげると、彼女はむすつとした顔を向けた。黄緑色の短い髪をし、齡は十四・五歳といった位の、背の低い女の子だった。

「いきなり手を掴んでおいて、離さないでよー」

怒っていた。

「いつたー。鼻が折れたかと思つたー」

そう言いながら両手の平で鼻筋を矯正し始める。一通り鼻を撫でまわすと、突然思い出したかのように叫び声をあげた。

「つていうか、なんで私に触れるのよ？」

目を見開いて清貴を見据える。

「人間が森の精霊である私に触れることなんて出来ないはずよ」

おかしいわ、なにかがおかしいわ、と一人でぶつぶつと頭を抱えて

いる。

「えっと、その、大丈夫？」

「大丈夫なわけないでしょ！」

「じめん」

「じめんで済んだら騎士は要らないのよ」

「どこでも似たような言葉があるらしい。」

「あなた何者なの？」

「俺は、清貴。信じなくてもいいがこの世界の人間じゃない。あの本当に森の精霊さん？」

「私が嘘ついているわけないでしょ！」

「うわ、怒られた」

昨日より怒られっぱなしだ。もう慣れてしまいそうだった。

「あなた本当にこの世界の者じゃないの？」

「信じてくれる？」

森の靈は腕を組んで考え込む。

「私に触られる時点で普通の人間じゃないわ。最上級の神官ならともかく、私たちが触ることを許さない限り、並みの人間じゃ触れるのは無理。おにいさんどう見ても身分低そうだしなあ。ありえないのよね~」

自覚があるのかどうか分からぬが、ひどい言ひ方だった。

「ねえ、私にもう一度触れてみて。それで確かめることにする」

清貴に真っ直ぐ向き直った。真剣なまなざしで見つめている。清貴は深呼吸をして手を伸ばす。

が、昨日ヤーナに快心の一撃を食らった足がぐりっと傾いた。

伸ばした手の平から、ふにふにとした柔らかい感触がした。清貴の手は、思いつきり彼女の胸を鷲掴みしていた。

「しつじらんない！ どこの触つてんのよ！」

胸に触れると同時に逆鱗にも触れたらしい。

「す、すまない。バランスが崩れたんだ」

「うそ！ 今すぐいいやらしい顔してた！」

「ち、違うんだ！ その、多分、昨日のヤーナといい、青髪のお姉

さんといい、もしかすると自分の中でも何かが限界だったんじゃない

かと思つー。」

木々が一瞬でざわめきを増したかと思つと、空を覆つ程の木の葉が空を舞つて清貴に降り注いだ。

地面に叩きつけられるともう起き上がる氣にもなれなかつた。

「バカバカ！ 今あんたがしたことの意味分かつてんの？」

「はい、胸を触りました」

「このバカ！」

「結構いい感じでした。つて、やめてやめて！ 首絞めるのやめて！」

いきなり息が出来なくなつたかと思つと森の靈の体が光を放ちだし、首を絞める力が解けていく。

「このバカああー！」

そう叫ぶと同時に、光が清貴の体内へと滑り込む。全身の感覚が消え、何かが体を走り抜けていく。

氣づくと、光も、森の精靈の姿も消えてなくなつていた。

そして不思議なことに昨日痛めた部位から痛みが綺麗に消え去つていた。

「なんだつたんだ、あいつ消えちまつたのか？」

「いるわよ。ここに」

振り向くと鼻先に彼女の顔があつた。

「うつわー、何してんだ？」

彼女はとこつと、清貴の肩に縋り付くよつとしてふわふわと浮いていた。

「あんたに娶られちゃったんでしょうが」

「娶られたあ？」

「あんたが私の胸に触つたせいよ。それが精霊を守護にする時の契約の儀式なのよ。普通の人間には私たちに触れることもできないから、こんなことは普通ありえないんだけど。まさか触れてみると言われて胸を選ぶなんて常識の無い人間がいるなんて思いもしなかつたもんだから……」

頬を膨らませて目を背ける。

心なしか顔が赤い。

「あなたの守護霊になっちゃったじやない」

「ちつ、あと少しくでパフパフ出来たのにつ！」

清貴はリーフ家に辿り着き、ことの成り行きを説明した。

馬二回言ふに不當林になつたこと。
州にふるの米靈を抱てしる

もちろん胸を触ったことかぎりかにである」とは伏せておいたのだけれども。

期待通りに三人は驚いてたが、リーフさんは興味深げに話を聞いてくれた。

「君が別の世界から来たということを疑っていたわけじゃないけど、これで証明されたんじゃないかな。彼女が言う通りに、普通私たちには精霊に触れることは出来ない。もちろん君は神官でもない訳だし、この世界の者じゃないからこそ、そういうことが可能なのかもしないね」

部屋の隅ではマリナが森の精霊に興味一杯で、あれやこれやと質問をぶつけている。歳が近いせいか意気投合しているように見える。

「なにはともあれ、このことはあまり口にしない方がいいかも知れないね。すごい能力であるがゆえに面倒なことに巻き込まれてしまつことも考えられるし」

清貴は申し訳なさそうに頭を下げる
「すみません。結局面倒をかけることになってしまって。変な奴も
連れて帰ってしまうし…

変な奴という言葉に森の精霊が反応していたが、それは無視した。

「いや、全く構わないよ。君はもつつかの人間さ。いつまでもここにいればいい」

リーフせんの好意に甘え、今しばらく厄介になる」とになってしま

つた。

次の日からいつものように農作業の手伝いを始め、毎日農園へ向かい汗を流す日々が続いた。

森の精霊には名前を付けてやつた。

ファーストインパクトそのままに「木の葉」。

本人もとりあえず気に入ってくれているらしい。次第に清貴にも懐きだし（？）気心が知れた仲になつていった。

木の葉はいつも清貴の肩のあたりに引っ付いて農園にも出かけた。清貴が精をだす姿を楽しそうに見守っている。木の葉からすれば、植物を育てる農家は愛おしい存在なのかもしれない。これでも森を守る靈なのだ。時々、木々などに母親のような口調で話しかけたりする。それは見ていてとても心が和むものだった。

入団試験に落ち、木の葉と出合つてから一か月ほど経つたある日のことだった。一日の仕事を終え、木の葉とつまらないことで仲良く言い合いをしながら帰り支度をしていると、少し離れたところにある木立に背を預けてこちらを見つめる女の子が目に映った。風に揺れる青色の髪を見てすぐにあの子だと気づいた。

清貴は農機具を放つて駆け出した。

「え？ ちょ、ちょっと」

いきなり走り出した清貴にびっくりしている木の葉にも構わず傍へと駆け寄った。

「お久しぶりね、おにいさん」

光がこぼれるような微笑みだった。

「よかつた～。やっぱおねえさんは夢じゃなかつたんだ」

安堵している清貴の姿を見て、くすくすと笑う。

やがて彼女の目は、清貴の肩に引っ付いている木の葉へと向けられる。

「そ、う。やつぱりそ、うだつたの」

妖艶に目を細める。

「ああ、こ、じつ？ 木の葉だよ。訳あつて一緒にいるんだ」

「こ、んにちば。森の精靈さん」

彼女は何かを含めたような微笑みを木の葉に向ける。

「あれ？ こいつが森の精靈だつて知つてるの？」

「ええ、もちろん。見れば分かるわ」

すると木の葉は隠れるように身を縮める。

「き、きよたか？」

「木の葉、なに怯えてんだ。大丈夫だよ。この人はお前と会つた前の日に、酒場で僕を介抱してくれた人なんだよ」

「きよたかは、この子誰だか知らないの？」

「えつ、誰つて……」

そういうえば、誰なんだろうと思つ。名前を聞いていなかつた。

「風の精靈、よ」

青い髪の女の子はそう言い、微笑んでいた。

「きよたか。この子と関わっちゃダメだよ～」

木の葉はひどく怯えていた。清貴の背中にぴつたりと引っ付いて体を震わせていた。

「その子を守護靈にできるということは、あなたが違う世界から來たといつのは本当みたいね。昔もいたのよ。あなたみたいな人。至つて普通の人間のくせに、精靈に触れることができる奴がね。おにいさんと同じように、この世界の人間じやなかつた」

「ほ、本当か？ 過去に僕と同じような人がいたのか。もつと詳しく述べてくれないか？」

「そう、ついに現れたのね。私の読みもはずれではないなかつたか」
清貴の問いに耳を傾けることもなく、独り言を言いながらじつとこちらを見つめている。次第に微笑みは消えて、鋭さを増していく。

「殺すに値するわ」

彼女が片手を振り上げると、ビームからともなく風が鋭く吹き乱れ始める。

「きよたか。逃げよ。本当に殺すつもりだよ…」

「な、なんで俺が殺されなきゃいけないんだよ…」

「訳は後で説明するから。早く…」

木の葉に急かされ、清貴は踵を返す。全力で走り出した。つもりだつた。

足元をすくわれたと思うと体が宙に浮かぶ。風は竜巻へと変化し、清貴と木の葉を渦の中へ飲み込んだ。上下左右も分からぬまま激風に晒される。木の葉は一生懸命に清貴に縋り付いていた。竜巻の中央では風の靈が青髪をなびかせながら楽しそうに一人を見上げていた。悔しいが何も抗えない。一人は次第に竜巻の上部へと巻き上げられ、ついに空高く弾きだされた。

ざつと二十メートルくらいは飛ばされただろうつか。森の端まで見渡せる。

「まずい、落ちるぞ」

上昇が止ると同時に、地面がものすごい速度で迫つてくる。死を明確に感じたその瞬間、木の葉が清貴の背から離れ両手を広げて叫んだ。

「みんな、力を貸して！」

風で巻き上げられていた葉が一斉に呼応し、木の葉に集りベッドくらいの厚みとなる。清貴と木の葉はその中へ頭からダイブする格好となつた。地面に着く直前で一人の落下は止まつた。代わりに集まつた葉が地面へ散らばる。

「助かつた。ありがとね、みんな」

清貴は、木の葉の持つ能力をそのとき初めて目にした。間違いなく

彼女は、森の木々たちを統べる守護者だつた。

「大丈夫？」

木の葉が差し伸べた手を取る「」すると、後方から風の精霊が再び手を振りかざすのが見えた。

「木の葉っ、危ない」

急いで彼女の手を掴んで、抱き寄せる。一人の上をかまいたちのような疾風が通過する。

目が回っているせいか、逃げようにも体が動かない。

そういうしている内に風の精霊は一人のすぐ足元に立ちはだかつた。木の葉は再び両手を広げて葉を集め。一団となつた葉が弾丸のように風の精霊へと突進していく。

だが、そんな渾身の一撃も風には太刀打ちできないらしい。風の精霊が手首から先を軽く振つただけで、散り散りになつて消えてしまつた。

「木の葉ちゃん、あなたが私に抗えるとでも思つていて？ 無駄よ。あなたは私には逆らえない」

微笑みを湛えたまま、新たな風を巻き起こして木の葉を地面に叩き付け、倒れ込んだところにさうして次の一撃を加えようと迫る。

清貴は駆け出し、風の精霊の両肩を掴んだ。

「やめてくれ。こいつは関係ない。僕が目的なんだつ。もう抵抗しないから。木の葉には手を出さないでくれ」

風の精霊は嬉しそうに、そして残酷に微笑んだ。

「そう、素晴らしい心がけね。いいでしょう。その子は見逃すことにするわ」

青色の髪が吹き上がる。周囲に再び風が巻出し、笛の様な音を上げる。

これが終わつて目が覚めたら元の世界に戻つていた、なんてことになつていればな。清貴は諦め半分にそう思う。その考えが見透かさ

れたのか彼女は相変わらずの笑顔で言った。

「おにいさんは、元の世界へは戻れないわね。戻る方法は一つしかないもの。まあ、あなたのような人には、到底不可能なことよ。だから無駄な期待を抱かずに眠りなさい」

竜巻は先ほどよりも遙かに強くなっていた。

清貴は観念するようにゆっくりと目を閉じた。
その瞬間。

「きよたか！ 胸！ 胸を触るのよ！」

竜巻の外から木の葉が振り絞るように叫んだ。

目を開く。すると、すぐ目の前に風の精霊の大振りな胸があつた。
そうか、触つてしまえば、こいつも守護霊になるんだ。

風の精霊は木の葉の声を聞き、きょとんとした顔を浮かべている。
そして清貴の視線を追つよう、自分の胸元を見る。
二人はおもむろに顔を上げ、ぽかんと見詰め合つ。

清貴は掴んでいた腕を素早く離し、脇腹の下から揉み上げんばかり
に両手を繰り出した。

「ぎやああああ！」

風の精霊は竜巻にも勝る大音声を上げて清貴を突き飛ばした。

吹き荒れる風は千々に乱れて消え去る。

間一髪で清貴の魔の手を逃れた風の精霊は、胸を抱きかかえるよう
にしてへたれ込んでいた。

「危なつ！ あつぶなあ～！」

頬が蒸氣し、先ほどまでの涼しい笑顔はもうなかつた。

「あなた頭沸いてるんじやないの！？」

「ちつ、あと少しでパフパフ出来たのにつ！」

「パフパフ！？」

風の精霊はぶるつと震えて清貴を見上げる。清貴は形勢逆転とばかり

りに彼女の前に仁王立ちした。

「ワンモワチャーンス！」

鉤爪のように構えられた清貴の両手は、一つの乳房を触らんとばかりに広げられていた。

先ほどまでとは打って変わり、風の精霊の目が恐怖に慄いている。この千載一遇の機会を逃す訳にはいかない。

風の精霊が片手を振り上げる。

やられる、清貴がそう思った瞬間、右の頬に強烈な破裂音が響く。

バッチーン！

疾風を叩きだしてくるかと思ったが、違っていた。ただ頬がひりひりと痛むだけだった。

ビンタだった。

「えっち！ 变態！ バカばかああ！」

風の精霊は両手で顔を伏せ、駄々っ子のように泣き始めた。

「あ、えっと？ そのごめん」

思わず謝ってしまった。

「じめんじや済まらないんだからあ！..」

風の靈は、ぎゃんぎゃんと泣き叫びつつ、清貴がいかに非道な行いをしようとしたか罵りつつ、まさに風の「」とく走り去つて行つてしまつた。

「私あんたの守護するのが間違つているような気がしてきた

木の葉が冷めた目で清貴を見ていた。

「お前のアドバイスだろ？が！」

「他意を感じるわ」

むしろ他意しかなかつたのも知れない。

「でも、守つてくれてありがとう」

黄緑色の髪を弄りながら、木の葉は礼を述べた。

「ちょっと格好良かつた、かな」

「木の葉……」

歩み寄る「」とした途端、木の葉はびくつと震える。

「もう触らせないんだからあーーー！」

小ぶりな胸を抱きかかえて守るよつ、またに舞う木の葉の「」とく走り去つていく。

自分から逃げ去つていく一人の女の子の背を見ながら、煩惱の代償つてでつかいんだな、と一人反省する清貴なのだつた。

「今なら分かる気がする。風の子が神官を失った後、どうしてみんなふつにな

その日の夜、もう触らないと誓いを立てる」とビーチか木の葉との関係を修復した清貴は、改めて風の精霊についての話を聞いた。

それはとても切実な内容だった。

ハイランドとヴァルジアの争いは、一夜では語り尽くせないほどの歴史がある。いつから両国が争うようになったのか、その始まりすらはつきりとはしていない。もしかすると互いが邂逅したその時から始まっていたのかもしれない。

古くからこの世界では精霊と呼ばれるものが存在し、複雑な自然の調和を取りなす者として崇められていた。精霊に守護される者はより強大な力を手にし、守護を得ない者をたやすく蹂躪することができた。両国はこそつて精霊を奉り、自国の繁栄と敵国の撃破を祈願したという。国の財政が逼迫するほどに神殿が建設され、言わば神頼み合戦となつていった。だが、神殿を建設して拝めば加護を得られるというわけではなく、真に精霊との関係を築くには契約が必要だった。國中から靈力の高い者を半ば強制的に連れ出し、精霊と契約できるだけの力を付与すべく特別な教育機関まで設立される。

だが、結果を言えばその大半が無駄に終わつたと言える。莊厳な神殿を作るために国力は大幅に削られ、労力の担い手となつた庶民は重なる重税と長い労役に精魂共に尽き果てて行つた。両国は戦う力さえ失い、共倒れ寸前というところまで来ていた。

そんな時、両国にほぼ同時に卓越した靈力を持つ者が現れた。一人はハイランドの貴族の家から教育機関へと進んだ女性。風の精霊と

対等な契約を結び、そのすべての力を付与された。もう一人はヴァルジアにおける奴隸の身分にある少女。雨の精霊と契約を結び、最高神官にまで任命されるといふことが起こった。

ハイランドは風を、ヴァルジアは雨の守護を得て、国力は漲るようにな隆盛していった。いよいよ一つの国は全面戦争に突入した。

最初はハイランドの風の軍団が連勝を飾り続けた。ヴァルジアの前線部隊はことごとく敗退し、その国土の三分の一をハイランドに譲ってしまう。だが、連勝に酔ったハイランドは中盤戦以降次々と敗走を続ける。眠りから覚めたかのように雨の軍団、ヴァルジアは進行し続け、ついにハイランドの都にまで到達した。

都の防衛線は地獄の極みだつたといふ。後の無いハイランド軍は都の中心に建てられた風の神殿だけでもヴァルジアに渡すまいと徹底抗戦を続けた。都にいた全てのハイランド人が軍事徴用され、死ぬまで戦うことを強要されたのだといふ。死に行く者たちは、誰もが風の精霊の栄光を叫んで生き途絶えたのだといふ。

必死の抵抗もやがて露と消えていく。主力部隊は後退を決意し、都是放棄された。風の神殿の周囲には、ヴァルジアの雨の軍団が包囲し、わずかに残つた手勢と共に風の精霊とその神官が残るのみとなつていた。そして、神殿への一斉攻撃が始まる。

当時発明されたばかりだった大砲が超至近弾として降り注いだ。柱廊の狭間から疾風が巻き起こる。砲弾は次々と軌道をずらされ検討外れな方向へ飛んでいく。だが、連日続く執拗な攻撃に風の精霊の力も限界を迎えることとなる。神殿は砲弾で随所が打ち砕かれ原型を失つていく。屋根が崩れる瞬間、そこに残つたヴァルジアの騎士たちはやはり風の精霊の栄光を叫び瓦礫の下へと消えた。

崩れ去つた風の神殿から這い上がつたのは、神官を抱きかかえた風の精靈だけだつた。彼女は、もう息をしなくなつた神官にいつまでも呼びかけ続け、悲愴に泣き叫んでいたといつ。それを見たヴァルジアの神官は、全ての攻撃を止め、休戦を申し入れることを進言したといつ。

話はこれでは済まなかつた。

好戦的な雨の精靈は、完全勝利を訴え、進撃を続けるよう神官へ詰め寄つた。だが、頑として受け付けなかつた彼女に激怒し、ついには独自で群を率いて進軍をはかつた。

誰にも予想できなかつたのはその後のヴァルジアの神官がとつた行動である。

彼女は、自害したのだつた。

その報を聞いた雨の精靈は、彼女の元へと駆け付けたがもはや息の音はなかつた。その後、ハイランドの都が沈むほどの豪雨が降り注ぎ、ヴァルジアの精銳部隊は消滅してしまつた。

それ以降、誰も風と雨の精靈を見た者はいないのでといつ。

そして、その舞台となつた場所は、廢都と呼ばれ誰も近寄らない場所となつた。

人々の間では廢都に足を踏み入れる者は風の精靈に連れて行かれ一度と戻つてくることはできないのだと噂されている。国神とまで崇められた風の精靈は、もはやその栄光の全てを失い、邪神として扱われているのだつた。なんとも皮肉な話だ。

「つまり、一時は国家の中核となつたほどの精靈なの。恐れ多いにも程があるくらいよ」

木の葉は、ひとしきり説明し終わると、忠告するように言つた。

「あんなふうになってしまった精霊っていうのは性質が悪いのよ。力がバカみたいに強いくせに、どこか切れたみたいなところがあるて、触れればただじや済まないのよ」

「そんな奴の胸触るうとしてたんだな、僕は」

「そう！ 本当にやばい子なんだから。気を付けてよね」

「いや、でも、あと少しであの胸に届きそうだつたんだ。上手くいつていればあの子も仲間にできたかもしれないのにな」

「……」

風の靈の胸を思い出す。何カツプあるのか分からないうが、今まで出会った誰よりも立派なものだつた。

あれにもう少しで触れていた。そう思つと、自然と顔が赤くなつていた。

「……」

「やっぱ、そのままじゃ不安だし、こっちから仕掛けに行つた方がいいのかな。いつどこから襲われるか分からないよりその方が」「きよたか」

「ん？」

木の葉は俯きがちに呼びかけると、なぜだか胸を隠すよつて両手で抱いている。

「そんなに触りたかったの？」

「ん？ 何を？」

「お、お胸」

清貴は慌てて弁明した。

「違う！ お前はどう思つているか知らないけど、ぼ、僕は決してそんな意図は

「いいよ。触つても」

言われている意味が理解できなかつた。

「だから……触つてもいいよ。私の胸……触つても……揉んでも

べ、別に、吸われても……、木の葉は「もむく」と口「もつながら」言つた。

「「、「木の葉？」

「今日、守つてもうつたし」

「いや、あれは別にそんなことのためにしたわけじゃない

「嫌なの？」

「嫌だと？」

「だから！ 私の胸じゃ嫌なのかな……。風の子みたいなおつきいお胸じゃなきや嫌なのかな？」

木の葉は泣きそうな顔を寄せて言つた。彼女の口から吐かれる息は、やけに湿つていて、苦しそうだった。

「本当にいいのか？」

「しつこよ、きよたか」

恐る恐るゆつくりと木の葉の胸に片手を伸ばす。木の葉は、今度は逃げたりしなかつた。

前のよつこ一瞬ではなく、じつくりと木の葉の柔肌を手のひらで弄ぶ。

もう片方の手も胸に添えて両側から揉みあげる。

木の葉は目を瞑り何度も、気持ちいい、と囁いた。

「ねえ、きよたか。私ね、きよたかが風の子を触れなくて、よかつたつて思つてるの。なんでか分かる？」

とろんとした目で木の葉は微笑む。

「そうしたら私だけのきよたかじゃなくなつちゃうもん。風の子みたいな精霊がついたやうと、きつと、きよたかは私の相手なんかしてくれなくなつちゃう」

「そんなことない」

「あるよ。絶対。私みたいな下級精霊、どこにだつているもん。きっと私がいなくなつちゃつても、きよたかなら私くらいの精霊すべ

に見つけちゃうよ

木の葉は清貴に抱きつくると、甘えるように言った。

「最近、森や農園の植物が元気いっぱいに成長しているでしょ、なんでか分かる?」

小さな唇が清貴の首筋を撫で上げる。

「きよたかに恋してるからだよ」

「木の葉……」

「だつて私のご主人様だもん!」

すぐ鼻の先ではにかむ彼女が堪らなく愛おしかった。

「今なら分かる気がするの。風の子が神官を失った後、どうしてあんなふうになつたのか」

清貴は朝が来るまで木の葉を離さなかつた。

彼女の寝息を感じながら心を決めた。

これ以上、木の葉を危険な目に合わせる訳にはいかない。

これは自分の問題だ。

朝日が薄らと滲みだす頃、清貴は一人静かに魔都へと向かつた。眠る木の葉をベッドに残して。

「少し寄り道をしてみる」

ハイランド騎士団長のヤーナは東へ向けて隊を率いていた。

目的は前線の視察だつた。前線は今、異様な勢力図を築いている。国境線をなぞる様に配置された防衛線は、ヴァルジア軍の急襲により一か所を抉るよう突き破られている。そして先へ歩を進ませまいと、ハイランド軍はその周囲に集結し強固な壁を作つている。堡壘を奪取したヴァルジアの重装女兵たちはいわば孤立無援。一個中隊百名強だけが無謀に前進しているという態だ。何倍もの戦力に取り囲まれ、昼夜に及ぶ攻撃を受けていた。

にも関わらず、彼女たちはその場を占守し続けている。圧倒的劣勢を前に微塵も怯むことなく、臆することなくそこに居座り続けていた。むしろ押されているのはハイランドの方とも見れる。

伝令からの報告はとても信用できない内容だった。

小柄なヴァルジアの女が重装に身を包み、一人で十人を相手に獅子奮迅の激戦を展開しているのだという。

それだけならまだよい。報告には聞き捨てならない一文が盛り込まれていた。

女兵の中には曲射大砲を肩に担ぎ、担いだままぶつ放す者がいるのだという。

小型砲でも信じられないような話だが、彼女たちが手にするのは弩級の城門突貫砲と呼ばれるものだ。それは籠城戦で強固な防壁を擊ち碎く目的で開発されたものだ。そんな代物を人が手にして撃てるはずはない。ましてや女が担ぐなど常軌を逸している。

前線で一体何が起きているのかこの目で確かめる必要がある。

「狂っているな」

同行する騎士たちに聞こえないようため息をついた。

「少しお疲れではありますんか？」

副団長のゲーリットが囁く。

「いちいち田舎者とな」

ヤーナの機微を手に取るようて察するこの男は頼りになる。だが、常に傍に置いておくにはいたさか面倒な男でもあった。

「ひよっこたちはどうだ？」

話を切り替えるように言つ。混成騎士団のことはほとんびゲーリットに任せた。

「まだまだ使い物にはなりますまい。個々の能力は高いが組織力がありません。総力戦で力を發揮できなければ戦場では役に立たないでしょうね」

「構わん。騎士の真似事でもな」

志願者たちをつっぱねるようてヤーナは言った。

「そうとも言い切れませんよ。役に立たないといつのは現状での話。はつきり言つて、見込みはそこいらの騎士よりも高いかもしません。身分や経歴など言つてしまえば戦場では役に立ちません。とどのつまり、戦場で勝つ者が持つらるものとは、どうのうな手を使つても勝つた者、ですから」

半ば諭すように言つたゲーリットを煙たそとに睨む。

「戯言だ」

脳裏にあの青年の姿が思い浮かぶ。腹部にそつと触れてみる。痛みは随分前に癒えたが、あの時のこと思い出すと疼くような感覚が広がる。あれ以来、町のどこにも彼の姿を見ていない。きっと町の者ではないのだろう。

もつ余つともない。そつと心の中で呟く。

「ヤーナ様、じき廃都です」

顔を上げ、目を細めて前方を見据える。丘陵を登りきると次第と視界が空へと開け、茫漠とした草原が広がる。風にそよぐ草の中に忽然と佇む悲愴な光景、風の都。

今となつては風の吹き晒しにされ、朽ち果てた廃墟群でしかない。この景色を見るのは心地良いものではない。しかし、前線へ最短距離で足を延ばすならここを通るのが最も早い。

ヤーナは風の都の攻防戦の話を母から聞いた。

グルム戦役の英雄。幼い頃から母だけが目標だつた。

彼女が生涯悔やみ続けたのがこの都で繰り広げられた攻防戦だつた。都から遙か離れたグルム谷で都への退路を断たれた母は、都の惨状を聞きながら進軍を余儀なくされた。その頃のハイランド軍は至る所で分断され、全体としての力を失つていた。軍団を進めるところで都への増援を僅かでも減らすこと、それだけが彼女に出来る都防衛戦だつた。ひたすらにハイランドの勝利を信じて戦い、グルム戦役において大勝を上げた彼女を待つていたのは、風の都の壊滅の報だつた。ハイランドだけではない。都を占拠していたヴァルジア軍も含めて空が割れたような豪雨に洗い流された。結果は、双方の主力部隊を失うことによる休戦だつた。結局はどちらも栄光を得ることなく、多くを失つただけだつた。

そして国力を取り戻したハイランドとヴァルジアは再び戦いを始めた。我々の間には血の歴史しかない。自分たちも、またその次の世代も、この歴史を踏襲していくのだろう。

いつか母は小さなヤーナを連れてこの廃都を訪れたことがあつた。母は言つた。

私には風の都を守れなかつた、と。

あれほど悲痛に歪んだ母の顔を見たのは最初で最後だつた。

母亡き今、ヤーナは密かな夢を抱いていた。

この風の都を再興したい。

今は瓦礫とかした廃都をつぶさに見つめれば、ここがいかに莊厳な

都であつたか想像するのは容易い。それに比べれば新都は真新しいだけのつまらないものにしか思えなかつた。

忘れられし風の靈の加護を再び得ることが出来れば、きっと。

しかし、今では有力な神官は一人もいなくなつてしまつた。それはヴァルジアも同じこと。あの攻防戦に消えた二人の神官の再来などは信じ難い。そんな空想にとらわれてしまふのは、きっとあの日の母の顔のせいだろう。

ぐいと口元を引き締め自分を正す。

まずは自分の成すべきことをすべきだ。

自身にそう言い聞かせ、今一度廃都を仰ぐ。

ふと、ヤーナの目が細まる。

廃都へと向かう人影が彼方に見えた。

ここに足を踏み入れる者などいはずなのに。

思いながらも、その影が気になつて仕方なくなる。

「ゲーリット」

「はい、なんでしょう

機敏な返事が返つてくる。

「少し寄り道をしよう」

ヤーナは影を追い、丘を下つて行つた。

「アストライアの天秤がかけられたのよ」

穏やかな風が吹き抜ける。

繁栄が風化し、人の息吹が絶えてしまったのは遙か太古であるかの
ような錯覚を感じさせる。

人がそこにいた跡というものは消え、確かにそこにあつた史実を神
話へと変えてしまう。

人が残せるものとは、そういうた茫漠とした感傷に過ぎないのかも
しれない。

風の都には、今では吹き抜ける風しか存在していない。

かつて往来であつたであろう石畳は枯れ、かさついた足音を響かせ
る。

だだつ広い草原の中での巨大な建造物群は水に浸かつたのだ。
にわかには信じられないような出来事だが、風の都の今の姿を見れば、それほどのことが起きない限りこれほどの都市が瓦礫の集積と
化すようなことはないだろう。

そして今でもこの都は風に守られている。

清貴は風の靈が口にした言葉を思い出していった。

元の世界へ戻る唯一の方法。

彼女は確かにそれを知っている。かつて存在したという自分と同じ
境遇の者を彼女は知っているのだ。

もう一度彼女に会つて話をする必要がある。残してきた木の葉のこ
とが気がかりではあつたが、どうせ止められるに決まつていて。そ
れであれば、自分一人でも真実を突き止める必要がある。自分は
この世界にいるべき人間ではない。それだけははつきりと分かって
いる。

もし元の世界に、あの東京へと戻ることが出来たなら、と考えてみる。

家族はどうしているだろうか。やはり心配していることだろう。一ヶ月以上もの間失踪しているのだ。大学だつてどうなつていて、か分からぬ。案外、死んだことになつていて。そんな笑えない想像をしてみる。

小一時間ほど歩いたところで足を止めた。

石段と思しき巨大な正方形の台座の上に、肌色をした石が折り重なるようにせり上がつていて。

風の神殿だ。

最後の防衛線が築かれていた場所。二つの強大な力を持つ精霊との神官が戦い、双方の主が息絶えた神殿。今は見る影もない。

その瓦礫の山の上で青色の髪が棚引いていた。

やはり風はここから吹いている。

清貴を見下ろすその表情は、逆光で窺うことが出来ない。

彼女はこの廢都をどのような目で見つめるのだろう。

胸の内に湧き上がる感傷を持て余しながら清貴は口を開いた。

「やあ。この前はどうも」

片手をあげて挨拶する。

風の精霊はしばらく押し黙つていたが、やがて声を発した。

「やあ」

ふわりと片手を上げて応じる姿が陰絵のように映る。

「今日は森の子を連れていないのね」

「まあ。これは僕の問題だから」

ポケットに手を突っ込んで氣のない風に答える。
ジーンズの中で、指先が震えていた。

「いい街、だつたんだろうね」

周囲を振り返りながら清貴は言った。

彼女は上げた手をだらりと下げる。

全身から何とも言い難い倦怠感を纏い、清貴を見下ろす。

「ええそうよ。この世で最も美しい都だつた」

「だろうね」

しばし沈黙が続く。先に言葉を発したのは清貴だつた。

「教えてくれないかな?」

「……」

「僕が元の世界に戻る方法」

「……」

「過去にいたんだよね。僕みたいな奴が」

「昔の話よ」

風の精靈は面倒臭そうに言い放つ。

「聞かせてくれないか? その昔の話つてやつを」

「聞いてどうするの?」

「戻るのさ。元の世界に」

「あの子を残して?」

「あの子?」

ため息のような声で言つ。

「森の子」

木の葉の笑顔を思い出す。怒った顔も、拗ねた顔も。

「あいつは関係ない

「ふんつ」

あしらうように鼻を鳴らすと、風の精靈は一歩ずつ瓦礫を降りてくれる。

「見上げたご主人様だこと。守護の契約を結んでおきながら無責任

極まりないのね」

徐々に彼女の影が大きくなる。足場は悪いはずなのに、清貴を見据えたままだった。

「絶対に教えないわ。あなたみたいな人には。絶対に知っているかしら、彼女は首を傾げて問い合わせる。

「守護靈は主人と一心同体。すべてを主人に捧げ、自身のすべてを投げ出してでも仕える者。契約を結んだその時から、私たちはその覚悟を決めている。なのに主人に取り残されれば、私たちはどうなると思う？」

清貴は答えなかつた。

だつて、それつて。

お前のことじやないか。

神殿の瓦礫から降りてきた風の精靈は試すように囁く。

「さて、どうするつもりかしら？」

距離はざつと十歩強。懷に入り込むには些か遠い。

「どうしても教えてくれないんだね」

「ええ、知りたいのであれば私を使役することね」

「僕の守護靈にさせれば、吐いてくれるのか？」

「もちろん。全身全靈をもつてあなたに仕えてあげるわ

」

そう言って微笑み、片手を畠にかざす。

その手は振り下ろされることはなく、清貴の次の一手を窺つている。

分が悪すぎる。

その手から風が発せられる前に彼女に触れるのは、どう考えても不可能だ。

まったくもつて友好的ではない彼女の笑みには、もはや恨めしさしか感じない。

美しさを纏つた冷酷さ。

それは真冬に吹く、張りつめた木枯らしのよう。

膠着状態というハイプレッシャー。

清貴はいよいよ身動きが取れなくなつた。

その時だつた。

「貴様ら何をしていん?」

振り向くと金色の長髪をなびかせる騎士が手綱を手に現れた。

風の精靈は田だけをそちらに遣つた。振り上げた手はそのままだ。

「お転婆ヤーナ。あなたこそ私の都に何をしに来たの?」

その姿を見るや、ヤーナの顔が緊張に染まる。

「風の……精靈……」

対峙する清貴に氣づき驚きの声を上げた。

「貴様はあの田の……、なぜここにいる?」

「質問されているのは、あんたの方だよ」

清貴がそう言つと、ヤーナは呆れたように言葉を返した。

「今、目の前にいるのが誰か分かつていいのか?」

清貴は頷く。

「風の精靈。かつての国神。風の都の守護者、だろ?」

「知つていてなぜここへ来た!」

馬の駆ける音と共に複数の騎士団員たちがヤーナの後方から現れる。

風の精靈の姿を見とめると、誰もが一様に凍りついた。

ヤーナはゆっくりと馬から降りる。それに従つて部下たちも同様に続いた。

「失礼した。我々は東の国境へと向かう途中、廃都へと向かう人影を見たもので様子を窺いにきた」

ヤーナ一行は礼儀正しく頭を下げた。

国神だったというのは本当だ。あのヤーナがこのよつた態度を見せるなど、入団試験の時の彼女からは想像もできない。

「そう。じゃあ、そのまま東へ向かいなさい」

あじりつよつと、視線を清貴へと戻す。

ヤーナは何かを言おうとして言葉を詰まらせている。

その場を立ち去る」ことができず、こいつ一行へ向けて彼女は口を開いた。

「あなたたちは信じられるかしら。この人はね、私に守護霊になれと言っているの」

ヤーナは口元を震わせながら呟いた。

「なにを馬鹿なつ……」

「元の世界に戻る方法を探しているそつよ。彼、この世界の人間じやないんだつて」

「それは、まさか！」

「そのまさかよ」

風の精霊はなんの迷いもなく、清貴めがけて手を振り下ろした。

「アストライアの天秤がかけられたのよ」

「私はしてやれるの！」のへりへりだ。はつせつて貴様に勝機はないわ

「大丈夫かっ！？」

清貴が目を開くと、すぐ傍にヤーナの顔があった。

「しつかりしる！」

肩を掴むと強引に清貴を起こした。

どうやらヤーナに助けられたらしい。

風の精霊がいらだつようにこぢらを見ている。

「ヤーナ、あなたも私に逆らつつもり？」

「些か不公平ではないだろ？」「

ヤーナが毅然と言い放った。

「不公平？」

風の精霊がいぶかしそうに眉をひそめる。

ヤーナは腰に帯びていた剣を引き抜き地面に刺した。

「こやつのような普通の人間が精霊相手にまともに対峙すれば敗北は必至。そのような不公平な戦いにあなたは満足されるのか？」

彼女は部下の騎士に顎で指示をだす。

すると騎士の一人が進み出てヤーナがしたのと同じように剣を地へ刺した。

「剣で戦えと、そういうことかしり！」

青髪を手で振り払い、睨みつける。

「あなたが風を使うなら、こやつは一生あなたの懷へは辿り着けまい」

清貴を振り返り、言葉を続ける。

「だが、剣であれば幾分か勝負にならう」

風の精霊の高笑いが響いた。

「勝負になる？　この私と？」

進み出て剣を引き抜き、切つ先を清貴に向ける。

「おもしろいわ。ほんの少しでもそんな馬鹿な考えを持つていいのなら、かかってきなさい。風は使わないであげるわ

清貴は耳を疑つた。

これは絶好のチャンスじゃないか。

助太刀してくれたヤーナを見ると、彼女は険しい表情で清貴の肩をたたいた。

「私にしてやれるのはこのくらいだ。はっきり言って貴様に勝機はないぞ」

清貴は小さく頷き、微笑み返した。

「ありがとうヤーナ。この礼は勝つた後に必ず返すよ」

彼女は何かを言おうとしたが、黙つて清貴から離れた。

ヤーナの剣を引き抜く。見た目よりもずっと軽量で、羽のようじに軽かつた。

風の精霊と再び対峙する。手の震えをはつきりと感じた。

「さあ、あなたからどうぞ」「

顎をしゃくって清貴を促す。

大きく深呼吸をして、ぐつと奥歯を食いしばる。

清貴は全力で走り出した。今限りの力を足に込めて。

風の精霊は剣を突き出したまま動じともせず、余裕に満ちた目で真つ直ぐ睨んでいる。

「おおおおつ！」

腹から力を振り絞るよつて剣を振り上げて初撃を打ち込む。

だが、風の精霊はあるまるでまるで清貴の剣の流れをなぞるかの如く華麗にそれを打ち流す。

バランスを崩して転びそうになるのを堪え、振り返りざまに横一文字に切りつける。

風の精霊はダンスのステップでも踏むようにひらりとかわす。

形勢は清貴の攻勢一方だった。

しかしまるで当たらない。剣を振つても振つても空氣を切るばかりでまるで手こたえを感じない。

「あら、もう疲労困憊つて感じかしら」

「ふ、ふざけるなつ、また……これからだ」

今一度渾身の力で振りつけるが、またしても流される。

さらに一撃、と風の精霊に挑むが腕がついてこない。

気づけば、彼女は清貴の目の前にいて、残酷に微笑んでいた。

清貴の額に人差し指を当てると、つんと押す。

たつたそれだけなのに、清貴はバランスを崩して仰向けに倒れてしまつ。

「恥に思つことはないわ。人の力なんてそんなものだから」

清貴を跨るようにして立つ。

その目は清貴への侮蔑の色に染まつている。

次いで利き手を踏みつけられ、手のひらから剣の柄が零れ落ちる。

清貴は最後の力を振り絞り、もう片方の手を風の精霊に伸ばす。

彼女の胸に触れさえすれば……。

風の精霊は清貴の手首を鷲掴みにするとあらぬ方向へじわじわと捻じ曲げる。

「あああ！」

悲鳴が漏れるが、抑えることができない。

「まだそんなことを企んでいるの？ 醜い人」

清貴を掴む手にさらに力が入る。

もう打つ手がなかつた。

「さあ、どうするのかしらね？ フハハハ」

面白くてしょうがないという感じだ。

打つ手はない。

打つ手がないのであれば……。

清貴は唇を噛み、見下げる彼女をにらみつける。

最後の攻勢。

手がないんだつたら。

「うおおおお！」

清貴の怒声に風の精霊が一瞬たじろぐ。

全力で身を乗り出し、体を伸ばす。

いよいよ両手がおかしな方へと曲がる。

踏みつけられていた手が鈍い音を上げた。

激痛がこみあげてくるが躊躇うことなく半身を伸ばす。

手が使えないのなら。

清貴は目一杯に口を開く。

「ひ、ひ、ひ、ひ！」

風の精霊が清貴の意図に気づいたらしく、短い悲鳴を上げた。

あの時と同じように、清貴に胸を揉み上げられそうになつたあの時と同じように、顔を恐怖に慄かせて

「い、いやああ～！！！」と叫んだ。

大きく開かれた清貴の口が、たわわな胸にしゃぶりつきそうになつた、その瞬間。

風の精霊は持つていた剣を投げ捨てて、天にその手をかざす。刹那、かつて見たこともない程の風の渦がそこに現れた。

「待て！ 風は使わない約束だぞ！」

外野にいたヤーナが声を上げる。

だが、半狂乱になつた風の精霊の耳には届かない。

触れるものすべてを切り刻んでしまいそうな渦が清貴目がけて急降下してくる。

「きよたかあ！！！」

少女の声と共に、黄緑色の美しい髪が揺れた。

「木の葉！」

「絶対にさせないんだからあーー！」

悲鳴にも似た木の葉の声が頭上に響く。

「だめだ木の葉！ 来るな！」

背の低い幼い体躯が風の渦の中へ飲み込まれる。

「木の葉あああ！！！」

あたり一面に引き裂かれた葉が舞い上がった。

清貴の目に映つたものは、強靭な風の刃に切り裂かれる木の葉の姿

だった。

「あなたの我儘、聞かせてくれる?」

昨日の夜、木の葉は清貴の腕の中でこう言つた。

「きよたかに恋してゐるからだよ」

「なあ、且、覚ませよ」

美しかつた黄緑色の髪は乱れ、

「お前は僕の守護靈なんだろ?」

元気に満ちた瞳は人形のように色を失い、

「僕のこと好きなんだろ?」

愛を告げた口は薄らと開き、

「僕もさ、木の葉のことが好きなんだ」

清貴の腕の中にいる木の葉はぐつたりとして動かない。

「こんなのありかよおお……」

これは遠い記憶の話だ。

その頃、私は国神と呼ばれていた。

誰もが私に傳き、敬つていた。

私はほほ、神だつた。

最も力を有する者のこととそつ呼ぶのなら、私は神だつた。だが実態は違う。私は彼らがするのと同様に一人の者に傳いていた。

彼女は美しい人だった。

階級で言えば貴族。

人間の世界において優位に立つ者。

人間において、神に近い者。

そういうた者は、精靈でも人間でも尊大な振る舞いをする者ばかりだ。
かくいう私がそうだった。

風の力は精靈の中でも第一級の力と支配力を持つ。
空を舞う私の上に立つものなど、太陽神くらいのものだ、と当時の
私は信じてやまなかつた。

そんな私にとつてくだらないのは人間たちの争い事だつた。
非力な力を見せ合つて、互いに傷ついていく。

どちらも弱いのだからそれらしく生きていればよいのに。

そう思いながら日々流れる血を、我関せずと面白おかしく見守つて
いた。

とある人間の男との離別以来、私はそんな風にしか人間を見れなく
なつていた。

ある日、私はハイランドの夜風となつていつものよつに空を舞つて
いた。

眼下の森に無数の灯が見えた。

ヴァルジアとの間に永続的に続く小競り合いの犠牲となつた者が逃
れてきたのだ。

ハイランドのいたるところで日にする光景にすぎない。

その森の中には豪奢な屋敷があつた。

貴族の家だろう。暖かい灯が籠れ、安寧とした雰囲気が感じられた。
力を持つ者、持たざる者。

ビートルだつてある一風景。

だが、なぜだろうか。

私はその日、遙か高高度を吹くのをやめて地上へ降りてみよつと思つたのだ。

くだらない人間が住まう場所へ。

屋敷の中に忍び降りた私が最初に耳にしたのは、少女の鳴き声だつた。

立派なドレスを着た幼い女の子。

顔を真っ赤にして鳴き声を上げていた。

その前に立つてゐるのは父親らしき男。これもまた立派な正装に身を包んだ紳士だつた。

何やら抗弁を続ける少女の頬を、その男は何度も打つた。

やがて呆れられたのか、その場に少女を残して男は屋敷の中へと入つていつた。

中では華やかなパーティーが繰り広げられていた。

私は面白おかしくて、少女へ近づいた。

「どうしたの？」

私は優しい聲音で問うた。

少女は泣きはらした目を私に向けて答えた。

「お父様に叱られたの」

「どうしてお父様はあなたを叱つたの？」

「私が我儘を言つたから……」

彼女は俯き呟いた。

「あなたの我儘、聞かせてくれる？」

少女は森の中で野営する民を屋敷に招き入れるよつ進言したのだと
いう。

彼女の父は最初それを「冗談かなにかだと笑って聞き流していた。しかし、何度も繰り返すうちに機嫌を損ねてしまった。

強情な性格をした少女は今宵のパーティーの席、皆の前でそのことをさらに願つたのだといつ。

彼が怒るのも理解できる。

貴族というものは不必要に誇り高いのだ。
それもあまり道徳的ではない意味で。

少女の言動は、彼にとつて皆の前で顔に泥を塗るような行為だったのだろう。

外に連れ出され叱責されるに至つた。

変わつた貴族の娘だ。

外の者など放つておけばよいものを。

結果、自分が放りだされたのでは意味がない。

「私たちだけ贅沢をして、外の人たちは家も食べ物もないのよ」
少女は言つ。

「だつてそんなの、不公平じゃない」

私はしゃがんで彼女の顔を覗き込んだ。

幼く小さな瞳は、力を秘めたようなギラギラとしたものを感じた。
私の中で何かが疼いた気がした。

「おねえちゃんは誰?」

「私? そうね、夜風よ」

「夜風?」

目をまんまと開いて首を傾げる。

「精霊……さん?」

私は頷いて見せた。

彼女はすがる様に私に言つたのだ。

「あの人たちを助けてあげて！」

馬鹿な子供だ。

大きくなれば父親の言つことも分かるようになるのだろうが、幼い時分には理解できないのだろう。

この世界で強く、したたかに生きていく術といつもを。力こそがすべてなのだ。

私はおかしくて、この子に意地悪をしてやうと考へた。

「それは無理よ」

「どうしてつ？」

「あなたに力がないからよ」

きょとんとした顔を浮かべている。

「何をするにしても、力が必要なの。私を使役するには私に見合つだけの力が必要なの。今あなたにそれがある？」

俄然、しょんぼりと肩を落としてうな垂れる。

「あなたにその力がある？」

殊更意地悪に私は問うた。

少女はゆっくりと顔を上げた。

その目の力強さに思わず面食らつたものだ。

「今は無い。でもいつか必ず」

私が空へ戻ろうとしたとき、彼女は言つたのだ。

「私が大きくなつて力を得たときは、私と共に弱い人たちを救つて生意気な子供だと思つた。

私を誰だと思っているのだろう。

私を使役することができると信じているなんて。

私は少女に頷き返して空へ戻つた。

彼女はいつまでも私の後ろ姿を見つめていた。

これが私がとある少女と出会った日の話だ。
やがて、ハイランド最高神官として人々から崇められ、私を傳かせ
ることになる女性。
なんとも面白おかしい夜の出来事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1099x/>

風の都 雨の都

2011年11月5日19時43分発行